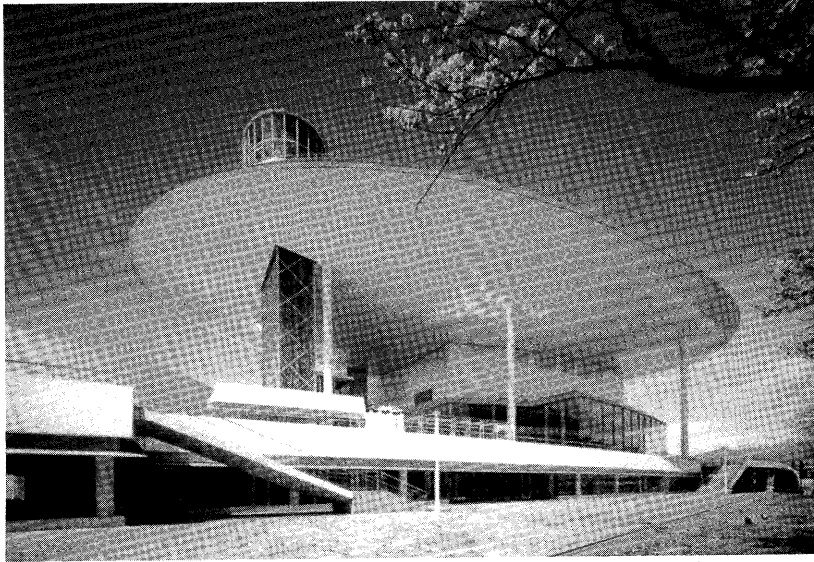


## 2. 桐生市市民文化会館

### ○ ホールの全景



### ○ ホールの概要

施設名	桐生市市民文化会館			
所在地	〒376-0024 群馬県桐生市織姫町2-5			
TEL/FAX	TEL: 0277-40-1500 / FAX: 0277-46-1126			
運営母体	(財)桐生市市民文化事業団			
立地都市の人口	11万8,419人			
施設構成・規模	ホール施設	シルクホール(1,517席):多目的、プロセニウム+昇降可変式音響反射板 小ホール(310席:センターステージ形式時):多目的、ステージ形式可変		
	その他施設	リハーサル室(2室)、練習室(2室)、展示室、レストラン、情報コーナー 学習・練習室(音楽練習室、ダンス練習室、アトリエ、AV編集室) スカイホール、会議研修室(会議室、国際会議室、和室)		
	敷地面積	28,000㎡	駐車台数	550台
	建築面積	7,608㎡	延べ床面積	18,215㎡
総事業費	141億5,467万円	建設工事費	130億4,622万円	
年間自主事業費	5,000万~1億円未満	自主事業公演数	11~30本	
総スタッフ数	19名	新規採用者数	14名	
基本理念	<ul style="list-style-type: none"> <li>芸術文化鑑賞の場、市民文化学習・発表の場、市民がふれ合う交流の場を整備し、ここを拠点とした市民の文化活動を支援・奨励することによって文化振興を図り、それを力として、本市の未来像である「ハイテクとファッションのまち桐生」実現に向けたまちづくりにも結び付けていこうとするものである。</li> </ul>			

## ● ホールの計画づくりの概要

<p>検討開始から開館までのプロセス</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>91年 6月:基本計画検討開始、市議会内に「市有施設設備調査特別委員会」設置</li> <li>92年10月:「(仮称)桐生市市民文化会館建設構想」策定</li> <li>93年 4月:専従組織、「(仮称)桐生市市民文化会館建設室」設置</li> <li>93年 5月:コンペの結果(株)坂倉建築研究所に決定→94年10月:発注、着工</li> <li>95年 7月:財団法人桐生市市民文化事業団設立</li> <li>97年 3月:竣工、シルクホールでテストコンサートを実施</li> <li>97年 5月:市民を対象とした施設内覧会を実施後、開館</li> </ul>
<p>設計者の選定と設計の進め方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>企画部局が担当となり、建築課、教育委員会の文化振興担当等から人材を集める形で体制を強化し、懇談会で市民から出された様々な要望を取捨選択しながら、行政担当部局内で草案づくり、コンペ要綱作成まで行った。</li> <li>コンペの実施にあたり、(財)日本建築学会関東支部長宛にコンペの審査員を務める学識経験者の推薦を依頼。</li> <li>昭和60年以降5,000㎡以上の文化施設の設計を行なったことのある設計事務所31社に参加の意向を問うアンケートを実施、審査員と市の担当による書類選考で参加希望の24社を5社に絞り、指名コンペを行った。</li> <li>コンペの後、設計事務所と打ち合わせを重ね、メンテナンス面も含めたプラスチックアルファの注文を出した。</li> </ul>
<p>設計者</p>	<p>(株)坂倉建築研究所</p>
<p>コンサルタント</p>	<p>建築音響:橋 秀樹氏(東京大学生産技術研究所 教授) (株)坂倉建築研究所を通じて)</p>
<p>運営方法の検討 運営体制の整備</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部コンサルタントの力を借りず、懇談会を設け、教育委員会内に設けられた担当部局(建設室)で、討議結果を特別委員会に諮りながら検討を進めた。</li> <li>現在、財団の職員は19名、うち5名が市からの派遣。</li> <li>技術スタッフはプロパーとして、公募で6名を新規採用。うち3名の経験者の採用にあたっては、論文と専門知識の試験を実施。</li> <li>専門知識の試験は、行政内では知識不足のため公文協の情報プラザに問題の作成を依頼した。前産業文化会館の技術者は継続雇用しなかった。</li> <li>通常財団で設けられている評議員会制度を主体的で自由な組織とするため、「企画運営委員会」という名称にし、自主事業策定のためのワーキンググループとしての機能を持たせている。</li> </ul>
<p>開館記念事業</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>開館の直前、市民を対象とした施設内覧会を実施し、新ホールの市民への周知を徹底するとともに、利用を促した。</li> <li>市の開館記念事業として、財団が市から委託を受ける形で、記念式典(太鼓の打ち初め)、市民による第九の演奏会、群馬交響楽団のガラコンサートが行われた。また、財団独自の開館記念事業として、マゼール指揮のフィルハーモニア管弦楽団のコンサートを実施した。</li> </ul>
<p>計画づくりにおける特徴・課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本事業は、老朽化した既存建物(産業文化会館)の建替え事業だったが、ホールの規模、機能、運営の方式等は旧会館とは大きく変わるもので、実質的には新しくホールを作ることと同じだった</li> <li>多目的ホールとはいえ、できるだけ用途にあわせた専門ホールの機能を持たせるため、国内で数少ない昇降可変式音響反射板を採用。初期費用がかかること、メンテナンスに注意が必要ではあるが、前記目的のためには有効。</li> <li>今後の大きな課題は、財団組織の硬直化(主に人事面)への対応。近隣市町村との広域文化圏で、人事を含めた事業交流ができれば理想なのだが。</li> </ul>